

ビースト・コード  
**BEAST CODE**

米村  
貴裕

リトル・ガリヴァー社



1	龍に変身！	3
2	対決！ 第一の刺客と	31
3	ふたりめの完全体	46
4	十億年前の決断	72
5	止められない記憶の侵食	90
6	死ぬか・裏切るか	107
7	さよなら 僕のバハムート	123
8	巨龍バトル	150
9	愛する心	167
10	黄金のオーパーツ	188
11	新時代の幕明け	200

●スタッフ●

◎編集

佐田 満

◎石版・カット

榎本

◎装丁

YUKI

◎表紙

デザインオフィスはな

◎コピー

宇田川 森和

## 1 龍に変身!

三階建ての高校校舎内がざわつき、授業はおしまい。今日は心ときめく春らしく、放課後に季節を思わず《お楽しみ》が待っている。そのためか驚くほど授業が長く感じられたのも事実。

やや痩身で、まだ何も知らない高校生、大林雷貴は短めの髪をかき分け、大きく伸びをしてから荷物をまとめた。

一斉に帰宅する生徒に混じって知子がいた。彼女は中学からの馴染みであり親友、清涼感の漂う滝のような長髪を皮ひもで結んでいた。やがて滴を逆さにしたようなポニーテール状に仕上げる。そんな赤い私服の知子とストリートに目があった。スレンダーながら、がっしりとした体格の彼女

が、力強い足取りでこちらに向かってくる。と、その日焼けした逞しい手が、いきなり雷貴のERI首を掴んだ!

一瞬、背負い投げで一本キメられるのかと冗談ぬきに思い、雷貴の体が自然と固くなる。だが、そうではない。彼女は白い波柄シャツのヨレを整えてくれたらしい。基本的に行動は荒いけれど根はやさしい女性。彼女が隣の席に座ってくる。

この様子を見ていたクラスメートが、さっそく声高に冷やかしてきた。

「いよっ! ラブラブう。おふたりはいつもお熱いですね!」

「おい中村。ストーカーされて困ってんだよ!」

当の中村は口を鳴らしながら、さっさと教室を出て行った。残った知子がわき腹を、引き締まった筋肉質のヒジで強く突いてきた。痛いつて。今の発言、ちよつとヤバかったな。

「誰がストーリーカードって？」と鋭く澄んだ声を発し、猛獣を思わす目と顔でにらみつけてきた。

雷貴は彼女が地獄の大噴火をする前に、とにかく頭を下げてひたすら謝った。

少し落ち着いた知子が、やわらかく清澄な声色で、珍しくからかってきた。

「そう、ラブラブよね。放課後、初デートでしょ。雷貴、ちゃんとお風呂入ったの？」

親指を立てた雷貴は、そのままの匂いを嗅いだ。ポディーツープのさわやかな芳香だけが、鼻を抜けていった。問題なし！身なりもバッチリだ。

この自信を確かめるかのように、温かく湿り気を帯びた知子の手が首元を怪しく、もて遊ぶように二、三度、そろそろとなでてくる。しなやかにふくよかな手の指が、首から背中をすーっとダンスしていく。

気持ちいいな。

ただ、いきなりの行為に雷貴は何もできず、体は理科室の人体模型のごとく硬直、カッとし、ほおと耳だけが瞬時に沸騰して熱くなった。毎朝、叩き起こされ、その際ペタペタと触られているとはいえ、照れは慣れで治るもんじゃないなあ。察した知子が体を揺らして小さく笑う。彼女の温かい息が顔にかかった。

「何、今さら恥ずかしくてんの。こんなんで大丈夫かしらねえ」

なおもくすぐる小麦色の丈夫な手を、雷貴はやや強引に払いのけた。

「それでも女かよ！」

なでて、おちよくる彼女が言葉を封じるべく、ほおに人指し指をグッと立ててきた。

だから痛いってば。

「じゃあ女の子のことを、あたしに色々訊ねる方

が、よっぽど恥ずかしくない？」

「しょうがないだろ。突然の事だったし、わかんない事はっかりだったんだ」

「たて食う虫も好き好きってことか。コレのどこがいいんだか」と、両手を天井すら破るほど高く上げる知子。これは、ふたりで何かするときのお決まり「ハイタッチ」の合図だ。

ヤレヤレという気分で、彼女へパチンと両手を合わせた。

「じゃ、あたしはおジャマ虫だから退散退散」

始終、落ち着きのなかった知子が席から離れていき、軽く手を振った。

ふと、廊下側の窓を見ると、初デートの彼女が既に待っていた！

クラスを隔てた同級生の彼女は背が高く、容姿はモデルのようにスマートだ。肌はヒマラヤ山脈の雪のごとき白さ。茶色く染めた前髪を軽くカー

ルさせ、金の可憐な髪飾りでとめていた。端正な顔には、氷山をも溶かしかねない光輝く満面の笑みを浮かべ、だつと駆けてくる。僕に抱きつかんと言わんばかりの勢い。

棒立ちの雷貴はおずおずと、知子に教えられた通りに手を出してみた。

へい。絶対に男性が女性をリードするのよ！わかった？」

すぐに白く、ほつそりとした手に握り返された。ひんやりとして磨き抜かれた大理石みたいに滑らかだ。肩を強張らせた雷貴は必死で声を絞り出した。

「と、とりあえず屋上、行こうか」

「うん」と、鈴の音にソックリな美しい響きの返答があった。

眉をひそめた知子のアドバイスが、また頭をかすめる。

へ最初は放課後の屋上で世間話をする。緊張を解きほぐしてあげるの〜

汗ばむ雷貴はぎこちなく、夕焼け空が見える屋上の、黒い鉄柵に体を並べた。ここまでは順調な滑り出し。白い彼女が、それとなく体をキュッと密着させ、桜色の唇を静々と揺らした。

「体育の時間に雷貴くんを見たの。そしたらね、胸がキュンときめいたの」

燃えるように熱くなった手を強く握り、真顔で目を見てくる彼女。ハイビスカスのような甘い香りの息が、顔のそばをいくども往復する。こんなときは……え〜つと。

へもし相手が積極的だったら、手順1から5はずっ飛ばしていいんだから〜

助言を思い出しつつ、雷貴は自身の心に問いかけた。

心臓は体から遠く抜け出る位に脈打ってるけれ

ど、恋心のせいかな、単なる緊張なのかわからない。とにかくマズイ。緊張を解いて欲しいのは僕の方だよ。どうしたらいいんだろう。

へ迷ったらGOよ！ あんたさ、一応性別は『オス』なんでしょ〜

雷貴は昼休みに知子からパシンと叩かれた、背中  
の強い感触を思い出した。ようし！

デート中のふたりが身を寄せ合う、ひと気のな  
い広い屋上の隅に、怪しげな人影があった。ひと  
りは全身白衣を着こみ、こざっぱりとした身なり  
をした中肉中背の男性で、貯水タンクの陰にもた  
れ、忙しなく小型の機械を操作する。

傍らには上下共にダークグレーで体にフィット  
した、目立たぬ衣服の女性が周囲を警戒。まるで  
野獣のように各部位のくびれがハッキリとして細  
身だ。しかし古き忍びの様に存在感を消し、感情

も殺している様子に思える。その女性が物静かな調子で口を開く。

「博士。擬獣化のリミットです。我々の脳には発信機があります。間もなく刺客が来ます」

額の汗を腕で荒く拭い、男性はしきりに機械を調整した。女性が淡々と確認する。

「彼で間違いありませんね。もし不完全な遺伝子だと、屋上の彼は破裂して即死します」

「一回目の放出で偶然、彼を発見できた。再チェックもした。彼はナーガの完全体だ。遺伝子内に別の体と、生きた心が閉じこめられている！」

男性はここでうつつむき地面のシミを見つめ、下唇を血が滴るほど強く噛んだ。

「説明できればよかつただけだね。仕方ない。擬獣化シグナルを送る。我々が助かるには、それしかない！」

「博士、手遅れのようにです」

女性が赤らんできた空に出来た黒い点を凝視、携帯している銃を腰から抜いた。

右隣に顔を向けた雷貴は、彼女の濁りのない瞳の中に全身が吸い込まれそうになった。

ええ!! ウソだろ。

彼女は無言で顔を近づけ、静かに目を閉じた。導入部の屋上で《手順28》まで進んじやつたぞ。何が完全アートのマニュアルだ。ウソばっか。昼飯代、全部返してもらわなきゃ。

心で愚痴りながらも背をまっすぐ伸ばして怯えつつ、顔をそっと近づけた。彼女が塗る薄めのリップが陽光で、銀河を創る恒星のように明るく煌いている。あと少しで。

ズズン!

腹に響く雷に似た轟音と共に、灰色の校舎全体が上下に揺れ、細かいコンクリート片と大量の埃

が付近を舞った。

なに、地震？

白い埃の壁、その向こうから、人型をした黒く巨大な影が出現。目を向けるとバケモノがいた！

茶色い狼の顔と人の体を持ち、黒いコウモリの翼を広げた、おぞましい姿だ。バケモノは太い毛むくじやらの腕を組み、どっしりと仁王立ち。頭上にある三角の耳はしきりに動き、凶暴そうに伸びた鼻先と口元からは、長く黄ばんだ犬歯が何本も見える。

彼女も相手に気づき、体を背けて空気を震わす金切り声を上げた。すぐさま僕の背中に強く掴まり、体を小さく丸めて顔を埋めた。男なら守らなければ……。

雷貴はヒザの震えを懸命に抑えて立ち、奇妙なバケモノに腕を向けた。だけど、恐怖で息がロクに吸えず声も出せない。茶色い大柄なバケモノが

不敵に鼻を鳴らした。

「こいつが護衛なのか。怯えてよ、息すらできてねえ」

その背から青白い別の顔が、靈魂のようにスイッと伸びた。

「博士の反応はここだ。間違いない。擬獣化されるとやっかいだ。すぐに殺れ」

応えるようにバケモノは、こげ茶色の腕をクロスさせカッと目を見開いた。間髪入れず、青白い顔の口からアメリカンサイズな火炎放射器のごとく、燃える焦熱の巨塊が噴出した。

ヤバイ！ 雷貴は背中の彼女を抱えて転がる。迫った炎を寸前で回避。火炎は側面をそのまま突き進む。床を黒く焦がし、すぐに貯水タンクへ命中。爆音を周囲に散らしてタンクを粉砕する。バケモノが憎々しげに大きく舌打ちし、またも強烈な炎の剣を出した。



地面に力なく這いつくばっている雷貴には、襲  
い来る火勢を避ける手立てがない。

初めてのデートで理由もわからず殺されるの  
か！ もうヤケだ。体で止めてやる。

背後の彼女を守るべく、雷貴は両腕を顔の前へ  
あげて目を閉じた。腕は丸焼けだな。

バン！

耳が痛くなる激しい音はしたがそれだけ。うつ  
すら目を開けると、灼熱の炎は腕の前で、花火み  
たく四散していた。え？ 僕の腕は炭化どころか  
焼けどすらしていない。だが肌の色が普段と違う。  
溶鉱炉の釜に近い黒さを持ち、皮膚が金属の輝き  
を放っている。狼とコウモリの中間が嘲笑して雷  
貴を指差す。バケモノが止めの雄たけびを発した。  
相手の指先が眩く光る。

辺りが真っ白になった。イナズマに近い電撃が  
雷貴を直撃した。空気中の水分は瞬時に蒸発。人

工の霧を作り上げた。必死に腕を左右に広げ、雷  
貴は身を盾にして、懸命に背後の彼女を守った。  
湯気を放つ手も、金属光沢の黒き肌になった。す  
べての指先から悪魔を思わす禍々しいカマ状のカ  
ギ爪が生えている。白い彼女がたじろいだ目つき  
で顔を小刻みに振り、ジリジリとあとずさる。つ  
いに見えるほどに大きく震え出した。

「イヤ！ イヤよ、やめて。近寄らないで。バ、  
バケモノ！」

そんな。彼女は僕を同じバケモノとして見てい  
る。甲高い悲鳴をあげた彼女は、止める間もなく  
衣服と髪を振り乱しながら錯乱状態で階段へと走  
り、すぐさま消えていった。

ビリ！ 僕の体は変化をつづける。丈夫な青い  
ジーンズが紙切れみたいに破れて、太い黒蛇が出  
てきた。いや違う。床のザラつきを感じる。これ  
は体の一部で尾だ。尾は一気にグンと伸び、鉄柵

をいとも簡単に折り曲げた。両腕は黒い金属の帷子、硬いウロコに覆われ髪の毛が逆立った。鬼と化した手を頭に当てると、象牙のような感触の角が、どんどん生えて伸びていくのがわかった。どうなってるんだ！

逃げ出した彼女と入れ替わるように、黒ズボンの知子が足音を立てて屋上にやってきた。

「雷貴、あんたナニやってる……！」

叱咤する荒い声が中途半端な所で止まった。知子もこの、バケモノの姿を見てるんだな。

目の前にいる野獣の首から、また薄気味悪い青白な顔が出た。

「完全にナーガ化されると厄介だ。ナーガは運命を変えろという。早く片付けろ！」

「お、おう」と、動揺した仕草を見せながらも、人と狼の中間が炎と電撃を一齐に放ってきた。その一部は、こちらを呆然と凝視している知子に向

かっている。

危ない！

雷貴は長い尾をガムシヤラに振り回し、知子へ飛んだ炎をすべて叩き落した。一方、両腕では光の大洪水である電撃を、泥人形のごとく粉々に吹き潰す。知子はゆっくりと、小麦色の逞しい腕を伸ばし、怯まずに近づいてきた。

「雷貴、あんた雷貴なの！」

問いかける鋭い声は高くて悲鳴に近い。雷貴は必死に答えようとしたけれど、顔の形も変わった。馬みたいに鼻先が長く伸びている。ムチそっくりな細いヒゲまで垂れた状態だ。

「ウー、ウーオー」

長い口では無様なうめき声しか出せない。これじゃ答えられないよ。

カンを働かせたのか、知子がおずおずと両手を高く上げた。これはハイタッチの合図だ。雷貴は

迷わず、黒く巨大になった手のひらを、知子を傷つけないよう、そっと合わせた。

「雷貴なのね……」

今の知子にいつもの元気さや、血気盛んに弾ける素振りはない。物静かに立ち、何をするでもなく、僕と違う方向を眺めている。

人間じゃないバケモノは怖いよね。しようがないか。高かったシャツもあっさり引き千切れた。体の長さ目線がどんどん変化していく。雷貴は無性に悔しくなり目に涙をため、声にならない掠れ声でうなった。こんなバケモノになるんなら、いつそ殺してくれ。

ここでわき腹に、温かくてふくらかな感触がした。記憶に新しい感触。見下ろすと知子が、手をパシパシとバケモノとなった黒い体に当てていた。「ほら。ちょっとお。龍になったくらいで泣いててもしょうがないでしょ！」

ええ、僕は龍なのか。もっとよく知りたい。

「ウー、ウー！」

「ウーじゃないの！ あたしを守って、あのへんちくりんと戦いなさいよ。意気地なし！」

知子はいつもの、バケモノをも超越しかねない雄々しい態度に戻っている。無理をしているのかもしれない。でも、ありがとう。彼女が接する温もりのおかげで勇気が出てきた。とにかく戦ってみるよ。

空から雷貴は鷹の目でバケモノを見下ろした。高飛車だった野獣の態度は消えうせ、バケモノは眼前の光景に啞然としていた。そんな折、崩壊した貯水タンクの陰から、男女が小走りにやってくる。白衣の中年男性が顔をこちらに上げた。

「雷貴君、彼らを解放してくれないか」

いきなり解放って言われてもわかんないよ、困ったな。雷貴は三角に飛び出た耳の後ろを、指で

ポリポリとかいた。すぐに知子が男性へ叫ぶ。

「どうすればいいのか、わからないみたい！」

助かった。クセを見抜いてくれた。男性がうなずき、口元に両手を当てて声を張った。

「頭に力を！ 頭のを聴いてみて！」

頭の声だっけ？ 超能力じゃあるまいし。けれども、とにかく気持ち頭を集中させた。

へ……私はどうなっているのだ

本当だ。遠くから微かに、低くて重みのある声がする！ 僕の耳元に伝わる。ならば、どうかお願いです。解放とやらの仕方を教えてください。

〈解放か……〉

頭に浮かぶジェスチャを雷貴は見よう見まねで行い、頭の声と同時にのどを高らかに鳴らした。

「リ、リ、ス」

狼は翼を伸ばして体を反転、脱出体勢。しかし間に合わず、その場に両手について倒れこんだ。

やがて彼らは個々の完全な（人間）となった。わめきながら散り散りに逃げ出してしまった。

「これでよし」と、白衣の男性がアゴの無精ひげをさする。

「よくないわよ！」

知子が態度と声に煮えたぎる活火山を思わず怒りをたぎらせた。ポニーテールを激しく揺らし、男性の胸倉に掴みかかる勢いでつめ寄る。始終冷静な態度だったタークグレイの女性が校庭の先にある、直線道路を指差した。

「警察車両です。擬獣化には一二〇秒かかりました。解くにも時間がかかりますね」

あーあ。大爆発した知子は白衣の男性の胸倉を、手でグイグイと締め上げてしまった。

「あんたね、雷貴を龍に変えて戦わせたのは！ 責任とんないよ、責任」

待った待ったと男性は身を引き、小刻みに手を

振って懸命に彼女をいさめている。

「すべてを話すから。とりあえず、街外れの自然公園で落ち合おう。雷貴君、飛べるかな。みんな、そこで待ち合わせだ」

雷貴の頭に歓喜の感情と、さつきよりも明瞭で荘厳な響きの声が伝わってきた。

へ飛ぶ。私はまた飛べるのか。どこよりも美しかった、あの桃色の大空を

桃色だって？ 頭に自分じゃない他人の音が響くのは、かなり嫌な感じがする。不愉快だな。

それより、うかうかしてられない。早く脱出しないとマズイ。目線を屋上に戻すと、白衣の男性が階段を駆け下りていくのがわかった。あれれ、肝心の知子はどこに？

見回していると、背中に人のやわらかな圧力を感じた。知子が僕の長躯な体に跨っていた。

「ほらほら雷貴。飛べるんですよ。あたしがさ、

チャーんと見といたげるから飛びなさいよ」

普段と全く変わらない、知子のどつしりとした行動が心底うれしい。ああだめだ。温泉みたくわき出る自然な感情には逆らえないや。視界が涙の川でグシヤグシヤに歪んだ。

パシ！ 後頭部に軽い刺激がした。

「ちよっと。ここいらに大雨でも降らす気？ ごつ龍が、わんわん泣いてどーするのよ。しっかりしなさいってば！」

そうだね。怒られてはっかりだ。よし飛ぶぞ。しっかりつかまって。僕はカギ爪のある指で自身の角を突ついた。察した知子が角を握り締めた。

その感触を確認し、雷貴は夕闇が迫るオレンジの空へ思い切って跳ねてみた。鉄柵から宙へジャンプした。羽も翼もない体なのに飛べた、飛べたよ！

嬉しくなって顔をめぐらせると、知子に眉間を